

にも申した通り、黒太夫の家には澤山の馬が飼つてある。そのなかから祐慶は白鹿毛の大きい馬を選び出しました。そこで、その綱を取つてゐる者は誰にしたら好いかといふ詮議になると、祐慶は大勢の馬飼のうちから捨松といふのを選びました。捨松は今年十五の少年で、赤兒のときに龍神の社の前に捨てあつたのを、黒太夫の家で拾ひあげて、捨子であるから捨松といふ名をつけて、今日まで育て、来たので、ほんたうの小飼ひの奉公人です。さういふわけで、親もわからない、身許も判らない人間です。黒太夫も不便を加へて召仕つてゐる。當人も一生懸命に働いてゐる。また不思議にこの捨松は馬があつかふことが上手で、まだ年も行かない癖に、どんな馴の強い馬でも見ごとに鎮めるといふので、大勢の馬飼のなかでも褒め者になつてゐる。それらの事情から祐慶もかれを選定することになつたのかも知れません。いづれにしても、青年の佛師は少年の馬飼と白鹿毛の馬とをモデルにして、いよく彼の木馬を製作に取りかゝつたのは、舊曆の七月の末、こゝらではもうすつかりと秋らしくなつた頃でした。

二一

「祐慶がどういふ風にして製作に従事したかといふ事は詳しく傳はつてゐませんが、屋敷内の森のなかに新しく細工場を作らせて、モデルの捨松と白鹿毛とのほかには誰も立入る事を許しませんでした。主人の黒太夫も覗くことは出来ない。かうして、七、八、九、十、十一と、あしかけ五ヶ月の後に、人間

と馬との彫刻が出来あがりました。時によると夜通して仕事をつゞけてゐることもあるらしく、夜ふけに壁や柱の音が微にきこえるのが何だか物凄いやうにも感じられたと云ふことでした。

いよく製作が成就して、五ヶ月ぶりで初めて細工場を出て来た祐慶は、髪や髭は伸び、頬は落ち、眼は窪んで、俄に十年も年を取つたやうに見えたさうですが、それでもその眼は生々と光りかゞやいてゐました。モデルの少年も馬もみな元氣が好いので、黒太夫一家でも先づ安心しました。出来あがつた木馬は勿論、その手綱を控へてゐる馬飼の姿形もまつたくモデルをその儘で、さながら生きてゐるやうにも見えたので、それを見た人々はみな感嘆の聲をあげたさうです。黒太夫も大層よろこんで手厚い禮物を贈ると、祐慶は辭退して何にも受取らない。かれは自分の長く伸びた髭をすこし切つて、これをそこらの山のなかに埋めて、小さい石を立て、置いてくれ、別に誰の墓とも記すには及ばないと、かう云ひ置いて早々にこゝを立去つてしまひました。不思議なことだとは思つたが、その云ふ通りにして小さい石の標を立て、誰が云ひ出したとも無しにそれを髭塚と呼ぶやうになりました。

そこで、吉日を選んで彼の木馬を社前に据ゑつける事になつたのは十二月の初めて、近村の者もみな集まる筈にしてゐると、その前夜の夜半から俄に雪がふり出しました。こゝらで十二月に雪の降るのはめづらしくもないのですが、曉方からそれがいよく激しくなつて、眼もあけない様な大吹雪となつたので、黒太夫の家でも何うしようかと躊躇してゐると、こゝらの人たちは雪に馴れてゐるのか、それとも信仰心が強いのか、この吹雪をも恐れなくて近村は勿論、遠いところからも續々あつまつて来るので、

もう猶豫してもめられない。午に近いころになつて、黒太夫の家では木馬を運び出すことになりました。好懸梅に雪もやゝ小降りになつたので、人々もいよ／＼元氣が出て、彼の木像と木馬を大きい車に積み重ねて、今や屋敷の門から挽き出さうとする時、馬小屋のなかで俄に高い嘶きの聲がきこえたかと思ふと、これまでモデルに使はれてゐた白鹿毛が何かの物怪でも附いたやうに狂ひ立つて、手綱をふり切つて門の外へ飛び出したのです。

人々も驚いて、あれ／＼と云ふところへ、彼の捨松が追つて來ました。馬は龍の池の方へ向つて驀地に駈けてゆく。捨松もつゞいて追つてゆく。雪は又ひとしきり激しくなつて、人も馬も白い渦のなかに巻き込まれて、とき／＼に見えたり隠れたりする。捨松は途中で手綱を握んだらしいのですが、けふは容易に取鎖めることが出來ず、狂ひ立つ奔馬に引き摺られて、吹雪のなかを轉んだり起きたりして駈けてゆく。他の馬も捨松に加勢するつもりで、あとから續いて追ひかけたので、雪が激しいのと、馬が疾いのとで、誰も追ひ付くことが出來ない。唯うしろの方から、おうい、おういと聲をかけるばかりでした。

そのうちに吹雪はいよ／＼激しくなつて、白い大浪が馬と人とを巻き込んだかと思ふと、二つながら忽ちにその影を見うしなつた。どうも池のなかへ吹き込まれたらしいのです。騒ぎはますます／＼大きくなつて、大勢が色々詮索したのですが、捨松も白鹿毛も結局ゆく／＼不明に終りました。やはり以前の木馬と同じやうに池の底に沈んだのであらうと諦めて、新しく作られた木像と木馬を龍神の社前に据ゑつ

けて、重んじかくも今日の式を終りましたが、もしやこれも又ぬけ出すやうなことはないかと、黒太夫の家からは朝に晩に見とけの者を出してゐましたが、木像も木馬も別條なく、社を守るやうに立つてゐるので、先づ安心はしたものの、それにつけても捨松と白鹿毛の死が悲しまれました。

誰が見ても、その木像と木馬はまつたく捨松と白鹿毛によく似てゐるので、あるひは名人の技倆によつて、人も馬もその魂を作品の方に奪はれてしまつて、わが身はどこかへ消え失せたのでは無いかなど云ふ者もありました。それから又附會して、今度の馬もとき／＼に嘶くとか、木像の捨松が口をきいたとか、色々の噂が傳へられるやうになりました。そこで、その名人の佛師はどうしたかと云ふと、その後の消息はよく判りません。どうも平泉で殺されたらしいと云ふことです。なにしろこゝで木像と木馬を作るために五ヶ月を費したので、平泉へ到着するのが非常におくれた。それが秀衡の感情を害した上に、仕事に取りかゝつてからも一向に抄が行かない、まるで氣ぬけのした人間のやうに見えたので、いよ／＼秀衡の機嫌を損じて、たうとう殺されてしまつたといふ噂です。かれが立際に髪を剃つて行つたのから考へると、自分自身にも内々その覺悟があつたのかも知れません。彼の池を以前は單に龍の池と呼んでゐたのですが、この事件があつて以來、更に馬といふ字を附け加へて、龍馬の池と呼ぶやうになつたのださうです。

『で、その木像と木馬は今も残つてゐるのですか。』と、わたしはこの話の終るのを待兼ねて訊きました。

「それには又お話があります。」と、横田君は静かに云ひました。「あとで聞くと、その社慶といふ佛師は日本人ではなく、宋から渡來した者ださうです。日本人ならば髪を切りさうなところを、髻を切つて残したといふのから考へても、なるほど唐の人らしく思はれます。それから七八百年の月日を過ぎるあひだに、土地にも色々の變遷があつて黒太夫の家は單に黒屋敷跡といふ名を残すばかりで、疾うの昔にほろびました。龍馬の池も山崩れや出水のために幾たびか其形をかへて、今では昔の半分にも足らないほどに小さくなつてしまひました。それでも龍神の社だけは江戸の末まで残つてゐたのですが、明治元年の奥羽戦争の際には、この白河が東軍西軍の激戦地となつたので、社も焼かれてしまひました。もうその跡に新しく建てるものもないので、そこらは雜草に埋められたまゝです。」

「さうすると、彼の木馬も一緒に焼けてしまつたのですね。」
 「誰もまあ然う思つてゐたのです。したがつて、そのゆくへを詮議する者もなかつたのですが、それからおよそ四十年ほど過ぎて、日露戦争の終つた後のことでした。この白河出身の者で、今は南京に雜貨店を開いてゐる堀井といふ男が、なにかの商賣用で長江をさかのぼつて蜀へゆくと、成都の城外——と云つても、六七里も離れた村ださうですが、その寂しい村の川のほとりに龍王廟といふのがある。その古い廟の前に大きい柳が立つてゐて、柳の下に木馬が据ゑてある。木馬は兎も角も、その馬の手綱を控へてゐる少年の木像が確かに日本人に相違ないので、堀井も不思議に思ひました。勿論、堀井は明治以後に生れた男で、龍馬の池の木像も木馬も見たことはないのですが、かねて話に聞いてゐるものによ

く似てゐるばかりか、その木像の顔容や風俗が日本の少年であると云ふことが、大いに彼の注意をひきました。土地の者について色々聞き合せてみましたが、いつの頃にどうして持つて來たのか一向にわからない、結局不得要領で歸つて來たさうですが、どうしてもそれは日本のものに相違ないと堀井は主張してゐました。もし果してそれが本當であるとすれば、木馬や木像が自然に支那人にても賣渡したのでありませんから、戦争のどさくさ紛れに誰か持ち出して、横濱あたりにゐる支那人にても賣渡したのであるまいかと相像されますが、實物大の木像や木馬をどうして人知れずに運搬したか、それが頗る疑問です。それを作つた佛師が支那人の人であるからと云つて、木像や木馬が何百年の後、自然に支那へ舞ひ戻つたとも思はれません。なにしろ堀井といふ男は龍馬の池の實物を見てゐないのですから、いかに彼が主張しても、果してそれが本物であるか何うかも疑問です。」

それからそれへと擴がつてゆく奇怪の物がたりを、わたしは黙つて聽いてゐるの外はありませんでした、横田君は最後にまた斯う云ひました。

「今まで長いお話をしましたが、近年になつて彼の龍馬の池に新しい不思議が発見されたのです。」
 まだ不思議があるのかと、わたしも少し驚いて、やはり黙つて相手の顔をながめてゐました。二人のあひだに据ゑてある火鉢の火が疾うに灰になつてゐるのをおたがひに氣が付かないのでした。
 「あなたを御案内したいと云ふのも、それが爲です。」と、横田君は云ひました。「今から七年ほど前のことです。宮城縣の中學の教師が生徒を連れて來たときに、龍馬の池のほとりて寫眞を撮つて、あとで

現像してみると、馬の手綱を取った少年の姿が水の上でありくと浮び出しているので、非常に驚いたと云ひます。その噂が傳はつてその後にも色々の人が来て撮影しました。東京からも三四人來ました。土地でも本職の寫眞師は勿論、われ／＼のアマチュアが續々押掛けて行つて、たび／＼撮影を試みましたが、めつたに成功しません。それでは全然駄目かと云ふと、十人に一人ぐらゐは成功して、確かに馬と少年の姿が浮いて見えるのです。」

「なるほど不思議ですね。」と、わたしも溜息をつきました。「さうして、あなたは成功しましたか。」

「いや、それが残念ながら不成功です。六七回も行つてみましたが、いつも失敗を繰返すので、わたくしはもう諦めてゐるのです。あなたがあなたのお出でになつたのは幸ひです。明日は是非お供しませう。」

「はあ、是非御案内をねがひませう。」

わたしの好奇心はいよ／＼募つて來ました。もう一つには、十人に一人ぐらゐしか成功しないといふ不思議の寫眞を見ごと自分のカメラに收めてみせようといふ一種の誇りも加はつて、わたくしは明日の來るのを待ち焦れてゐました。

三

あくる朝は幸ひに晴れてゐたので、わたしは早朝から支度をして、横田君と一緒に出ました。横田君も寫眞機を帶び、ほかに店の小僧ひとり連れてゆきました。池の近所に飯を食はせるやうな家はない

といふので、辨當やビールなどをバスケットに入れて、それを小僧に持たせたのです。

三里ほどは乗合馬車にゆられて行つて、それから知道や森や岡を越えて、やはり三里ほども徒歩でゆくと、だん／＼に山に近いところへ出ました。横田君や小僧は土地の人ですから、この位の途は平氣です。わたしも旅行慣れてゐるので、別に驚きもしませんでした。小僧は昌吉と云つて、今年十六歳うですが、年の割には柄の大きい、見るから丈夫さうな、さうして中々利口さうな少年でした。したがつて、若主人の横田君にも可愛かられてゐるらしく、横田君がどこへ出る時には、いつも彼を供に連れてゆくと云ふことでした。

「この昌吉もゆうべお話をした木像のモデルと同じやうな身の上なのです。」と、横田君はあるきながら話しました。「これも両親は判らないのです。」

昌吉といふ少年も、やはり捨子で、両親も身もとも判らない。それを横田君の家で引取つて、三つの年から育てゝやつたのだと云ふことでした。それを聴かされて、わたしも彼の捨松といふ馬飼ひのむかし話を思ひ出して、けふの寫眞旅行に彼を連れてゆくのも、なんだか種の因縁があるやうに感じられました。昌吉はまつたく利口な人間で、途中でも油断なく我々の世話をしてくれました。

午に近い頃に目的地へゆき着きましたが、横田君の話で想像してゐたのとは餘ほど違つてゐて、なるほど大木もあります。晝でも薄暗いといふやうな幽暗な場所ではなく、寧ろ見晴しの好い、明るい氣分のところでした。

「また伐つたな。」と、横田君はひとり言のやうに云ひました。近來しきりに此邊の樹木を伐り出すので、だん／＼に周囲が明るくなつて、むかしの神秘的な気分が著るしく薄れて来たたとのことでした。どこでも同じことで、これは已むを得ないでせう。しかし龍神の社の跡だと云ふところは、人よりも高い雑草にうづめられて、容易に踏み込めざうありませんでした。

三人は池のほとりの大樹の下に一休みして、それから昌吉が盡力して午飯の支度にかゝりました。横田君は色々の準備をして来たとみえて、バスケットの中から湯沸しを把り出して、こゝで湯を沸かして茶をこしらへるといふわけです。朝から晴れた大空は藍色に高く澄んで、そよとの風もありません。横田君の大きな枯葉が時々音も無しに落ちるばかりで、池の水は静かに淀んでゐます。岸の一部には蘆や芒が繁つてゐるが、ほかに水草らしいものも見えず、どちらかと云へば清らかな池です。これが色々の傳説を藏してゐる龍馬の池であるかと思ふと、わたしは軽い失望を感じて、なんだか横田君にあざむかれてゐるやうにも思はれました。

「水を汲んで来ます。」

かう云つて、昌吉は湯沸かしを提げて行きました。池の北にある櫻の大樹の下に清水の湧くところがある。その水がこの池に落ちるのださうで、夏でも氷のやうに冷たいと横田君は説明してゐました。

「さあ、茶の出来るあひだに、仕事を始めますかな。」

横田君は寫眞機をとり出しました。わたしも機械を把り出して、ふたりは色々の位置から四五枚寫し

ましたが、昌吉はなか／＼歸つて来ません。

「あいつ、何をしてゐるのかた。」

横田君は大きい聲で彼の名を呼びましたが、返事がない。そのうちに氣が注くと、彼の湯わかしはバスケットの傍に置いてあつて、中には綺麗な水が入れてありました。我々が寫眞に夢中になつてゐるあひだに、昌吉はもう水を汲んで来たらしいのですが、さてその本人の姿が見えない。いつまで待つてもゐられないので、横田君はその所の枯枝や落葉を拾つて来る。わたしも手傳つて火を焚いて、湯を沸かす、茶を淹れる。かうして午飯を食ひ始めたのですが、昌吉はまだ歸らない。ふたりはだん／＼に一種の不安をおぼえて、たがひに顔を見あはせました。

「どうしたのでせう。」

「どうしましたか。」

早々に飯を食つてしまつて、ふたりは昌吉のゆくへ搜索に取りかゝりました。ふたりは池をひとまはりして、更に近所の森や草原をかけめぐりました。龍神の社の跡といふ草むらをも掻きわけて、およそ二時間ほども搜索をつづけたのですが、昌吉はどうしても見付かりません。横田君もわたしもがつかりして草の上に乗つてしまひました。

「もう仕様がありません。家へ歸つて出直して来ませう。」と、横田君は云ひました。

バスケットなどはそこに置いたまゝで、ふたりは早々に歸り支度をしました。日の暮れかゝる頃に町

へ戻つて来て、そのことを報告すると、店の人々もおどろいて、店の者や出入りの者や、近所の人なども一緒にたつて、二十人ほどが龍馬の池へ出てゆきました。横田君も先立ちになつて再び出かけました。

「あなたはお疲れてせうから、風呂へ這入つてゆつくりお休み下さい。」

横田君はかう云ひ置いて出て行きましたが、とても寝られるわけのものではありません。私もおちつかない心持で捜索隊の歸るのを待ち暮してみますと、夜なかなつて横田君等は引揚げて來ました。

「昌吉はどうしても見つかりません。」

その報告を聴かされて、私もいよ／＼がつかりました。それと同時に、昌吉のゆくへ不明は彼の捨松とおなじやうな運命ではあるまいかと考へられました。

わたしはその翌日もこゝに滞在して、昌吉の行く末をみとどけたいと思つてみますと、けふは警察や青年團も出張して、大がりの捜索をつけたのですが、少年のゆくへは結局不明に終りました。いつまでこゝの厄介になつてもあられないので、私は次の日に出發して、宇都宮に一日を暮して、それから眞直に歸京しましたが、何分にも昌吉のことが氣にかゝるので、横田君に手紙を出してその後の模様を問ひあはせると、二三日の後に返事が來ました。その文句は大體こんなことでした。

前略、折角御立寄りくだされ候ところ、意外の椿事出來のために種々御心配相かけ、なんとも申譯無

御座候。昌吉のゆくへは遂に相分り申さず、さりとて家出するやうな仔細も無之、唯々不思議と申すのほか無御座候。萬一彼の捨松の二代目にもやと龍馬の池の水中捜索をこゝろみ候へども、これも無効に終り申候。

こゝに又、不思議に存じられ候は、當日小生が撮影五枚の中、一枚には少年のすがた朦朧とあらはれ居り候ことに御座候。それは影のやうに薄く、勿論はつきりとは相分り兼ね候へども、それがどうも昌吉の姿らしくも思はれ申候。

貴下御撮影の分は如何、現像の結果御しらせ下され候は幸甚に存じ候。

先づこんな意味であつたので、わたしも取りあへず自分の撮影の分を現像してみました。どこにも人の影らしいものなど見だされませんでした。横田君の寫眞にはどういふ影があらはれてゐるのか、その實物を見ないのでよく判りません。

夕涼み江戸



昭和十四年八月十日印刷
昭和十四年八月十五日發行

定價金九拾八錢

著者 岡本綺堂

東京市日本橋區通三丁目八番地

發行者 和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 熊平武二

東京市神田區鎌倉町五番地ノ二

印刷所 東陽印刷株式會社

東京市日本橋區通三丁目八番地

發行所 株式會社 春陽堂書店

電話 五〇一・一九四八 振替 一六一七
日本橋 四三七三・四八四八 東京

綺堂讀物集一

兩國の秋

綺堂讀物集二

ものがたり十八夜

綺堂讀物集三

夕涼み江戸噺

胡堂奇談集一

芳年寫生帖

胡堂奇談集二

二挺十手

胡堂奇談集三

變化七小町

喜久雄捕物集一

巷説快盜傳

喜久雄捕物集二

怪異雛人形

續々近刊 各冊六判四百頁以上 九錢八十錢 送料十錢 附ビル

390

501

終

